

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会
 〒136 東京都江東区夢の島3-2
 都立・第五福竜丸展示館内
 電話 (521) 8494



1986年1月、マジュロ。 マジュロの小島に仮住しているビキニの人たちが、ボートで市街に買い物にやってきた。1978年以来、無人島になっているビキニも、今年から再帰住のためのクリーンナップ作業は始まり、長い流浪の歴史に終止符をうつ日が近づいてきた(撮影 島田興生)。

スコール 武政 博

スコールに打たれるな
 沖で水爆の実験があった
 マグロ漁船が被爆した
 ザンザつくスコールの
 ギラつく甲板の上で
 おれたちが万力になり
 錆打ちハンマーになっている時
 スコールに打たれるなど
 サロンで
 海水の沸きたつ浴槽で
 かたふり話に聞いていた
 信じられない笑い話を
 おれたちは甲板に流しながら
 スコールを浴びていた
 たったそれだけの笑い話が
 南太平洋とおれたちの
 被爆のはじまりだった
 おれたちが玩具になる
 はじまりだった

あれから三十年
 南太平洋にスコールは来るか
 沸きたつ海水の風呂は昔話か
 だが おれたちの血液の海は
 ザンザつき 沸きたち悪魔の
 スコールがやってくる
 認定されない放射能症の甲板に。

展示館を見学して

教師からの手紙

ショックを受けた生徒たち
 先日は、見学にまいりました際、
 ごていねいな説明をきかせていた
 だき、大変ありがとうございました。

第五福竜丸は、副読本に出ているので、特に教材として取りあげ、みんなで調べて、プリントで学習してから行きました。見学先は、東京湾岸沿い全体でしたが、帰ってから感想をききましたところ、一番印象に残ったのが、第五福竜丸ということ、びっくりしました。二、三人、三日ほど、元気がなくなり、大部ショックを受けたようで、母親から問い合わせで、「何かあったのでしょうか」と、きかれた程です。

それから、みんなでまとめの学習をし、感想を書きました。だれかの発言から、当館に折り鶴があったことの発表を聞いて、みんな折り鶴を折ろうと、私たちの方で提案いたしました。四クラス、千羽ずつ折りました。一つは、第五福竜丸の人をなぐさめるため、

一つは、これからこんなことがおこらないようにするためです。
 会場にあったハガキに印をおし持ちかえってしまった子がかなりいたので、これについてはおわびをすることになり、切手と折り紙のカンパをあつめました。わずかですが、お受け取り下さい。みなさまの御活躍をお祈り致します(板橋区立蓮根小学校四年担任一同 寺田、藤枝、小野、原田)。

教職一年目の今……

四月、希望に胸ふくらませて教職についてはや一年がたとうとしている今、三年(中学)担当の私は今、進路の問題で心を痛めている。ひとりひとり個性をもった生徒たち。みんなさまざまな能力と長所をもっている。彼らは学校という集団の中でさまざまなぶつかり合いを経つつ、お互いの人間を認め合い、成長してきた。ところが彼らが中3も終わろうとする今、教師たちは自らがつけた成績をも

とに、生徒達を輪切りにして高校へ送りこむ準備に忙しがっている。私はひとりひとりの尊さを理解した主権者を育てる一助を担いたいと思いつつ社会科の授業を行っている。ところが万遍ない知識を問うテスト体制の下で、学校教育は大きくねじ曲げられてしまっている。授業で南京大虐殺や東京大空襲、水俣病、工場の「合理化」問題などを扱ってきたが、そんな事より受験に役立つものをという父母や生徒の声も強い。

けれども、現状に甘んじるのではなく、私達は一人ひとり素晴らしい生徒達が手をとりあって伸びるよう援助しなければいけない。今地球上に山積する、核兵器、貧困、自然破壊、差別、戦争などの問題の解決に一步でも近づくためにも、その姿勢をもって頑張らねばならないと思う。みんなが幸せに暮らしていける真の平和を築くために(第五福竜丸記念館もそのための大きな意義をもつものと考え)。状況は厳しいが、教育とは何かを考えながら最善を尽くしてゆきたい(小泉靖志)。

編集後記

▼今年の展示館は、落合組の人たちの心づくしの門松で、例年よりお正月らしい雰囲気、新年を迎えました。一年以上にわたる工事からは、船体工事と同時進行で、床の改修工事も行なわれます。お世話になった落合組の人たち。三ヶ月でお別れだなあ——第五福竜丸の新たな航海の日は、ちよっぴり淋しい日にもなりそうです。
 ▼国際平和年の今年、展示館は六月で開設十周年を迎えます。そこで、「福竜丸だより」でも十周年を記念して、特集号を企画中です。ご期待下さい▼今年も福竜丸を見に、たくさん子どもたちが訪れることと思います。子どもたち一人ひとりの胸に平和の種子が宿り、広がることを願っています(は)。

100万人参観者運動を!

85年12月来館者数	7,053名
通算1カ月平均来館者数	5,311名
当月1日平均来館者数	294名
通算来館者数	610,766名

新年のごあいさつ

第五福竜丸平和協会会長
三宅 泰雄

新年おめでとうございます。昨年とは協会にとって、記念すべき年でした。その一つは五福竜丸の大修理が行われたことです。すでに以前から、船体が崩壊寸前の状態にあることが、専門家によって指摘されていました。

この緊急事態を救済するため、東京都は約一億円の多額な予算を計上し、文化財建造物保存技術協会による調査、設計、落合組の施行により、この大事業にとりかかりました。

ここにいたるまで、岩崎友吉(東京国立文化財研究所名誉研究員)、竹鼻三雄(東大名誉教授、船舶工学)、小佐田哲男(東大教授、船舶工学)諸先生には、ずいぶんお世話になりました。おかげで、第五福竜丸は今年四月には、新生の姿でみなさまにお目見得することになります。あらためて、東京都はじめ、お世話になった方々に厚く御礼を申し上げます。

第二には、これまでも小、中学校からの見学はありましたが、昨年はこれが急増したことです。昨十月には実に一三〇校にものぼる見学申込みがありました。主として東京都内の学校ですが、他府県からの見学も増えてきました。このことは、平和のための社会教育を主要な目的としている当協会にとっては、ありがたいことです。

いままでは、教育界に対し、とくに積極的なはたらきかけをしてきませんでした。しかし、こんごは教育界とも連携を密にして、ますます平和教育のお役に立つようになりたいと考えています。

今年は展示館開設十周年となります。そのための記念事業も計画中です。なにとぞ、みなさまからの、いっそうのご支援を賜りますようお願いいたします。

国際平和年と開設十周年を迎えて

川崎昭一郎

ことし一九八六年は国際平和年(IYP=International Year of Peace)です。一九八二年十一月十六日の国連総会で全会一致で決議され、昨年十月二十四日の国連創立四十周年記念日に正式に宣言されました。

国連事務総長報告(一九八五年九月二六日付)のガイドラインは、IYPの目的の説明で、現代世界における平和の基本的要件として社会の関心を向けなければならぬものとして七項目をあげ、その一つとして軍縮の緊要性と核破壊の防止を明記しています。また、平和とは、平和と発展、平和と軍縮、平和に生きるための準備、の三つの側面をもつと指摘しています。

すでに国連での議論では、平和とはたんに戦争を防止すること以上の意味をもつものであるとの考え方が定着していますが、今回のIYPでも、将来の世代のためにより安全で公正な世界を創造した

いとの願いがこめられ、「平和と人類の未来を防衛するために」とのサブタイトルをつけることが考えられています。したがって、IYPをつうじて平和教育等の役割が強調され、IYPで開始されたイニシヤチブが翌年以降もねばりよく継続することが求められています。

第五福竜丸展示館は、折しもIYPの年に開設十周年を迎えます。第五福竜丸を、将来の水爆戦争の恐ろしさを世界に警告しつづけるかけがえのないエビデンスとして保存しようという草の根の努力がついにのり、展示館が実現したと、展示館開設以来この十年間にすでに六一万をこえる見学者が訪れ、多大の感銘を与えてきたこと、来館者の中にとりわけ小・中・高校の生徒が多数含まれていることなど、展示館の果しているユニークな役割を、この機会に国連をつうじてさらにひろく世界に知らせることが必要だと思えます。

来年六月に予定されている展示館開設十周年記念行事も、IYPのイベントとして登録し、成功させようではありませんか。
(第五福竜丸平和協会理事)



< 2 >

写真・文 島田 興生

三〇あまりの島のすべてがさんご礁からできているマーシャル諸島。この「首都」マジロ島(マジロ環礁)もさんご礁の島だ。マジロの市街はいまはDUDと略称され、かつてはグリット、ウリガ、ディラップの三島があった部分(これらの島を含め、マジロの島は北はリタから西のロー

ラまで埋め立てられて陸続きになっている)に商店やオフィスに集ってダウンタウンをつくっている。私たちが住んでいる所は、このダウンタウンから車で約五分、礁湖と太平洋の二つの海にはさまれた細長い島の太平洋側の海岸で、家の北側には視界いっぱいにおだやかな海が広がっている。



アンローさんと妻のレベッカさん(1985年6月撮影、エジット島)。

陸上にはヤシやパンの樹をはじめとする南洋樹の緑もよく、アメリカ、オーストラリア人のほかにフィリピン、中国人などの大勢の外国人もいるが、地元のマーシャル人の太平洋人的ムードにあわせてのんびりと暮らしている。しかし、この平和な島にも核の後遺症の影がくっきりと残っている所がある。政府の運営する「イソダメモリアル」病院とエジット島に住むビキニの人々のことだ。このイソダ病院の様子は次回に書くことにして、エジット島のことをお伝えする。

私たちの住むリタの村から先は道はなく、干潮の時だけ渡るパス(水路)をはさんで十数島かの小島が北へ連らなっている。潮のひいた浅瀬を三〇分ほど歩くと、三つ目の島がエジット島だ、海と海の間が五、六〇メートル、長さ二〇〇メートルあるかないかの小島に、一九七八年にビキニから引揚げてきた人たち二百二十八人(十六家族)が住んでいる。残留放射能の危険が叫ばれていたビキニにアメリカ政府の勧めを受入れ

て帰島し、六年あまりの生活後、体内に放射能を取り入れてしまい、強制的に引揚げさせられた人々だ。ヤシ林の間に点々と、二〇戸あまりのベニヤと角材の簡易住宅が並んでいる。

電気も水道もないので、時々、自家発電機でビデオのテレビを見たり、電気洗濯機を廻している。と言うのも、ビキニの人々には小額(一カ月一人三十八ドル)といえ生活補償金と食料援助が入るからで、貧しい人の多い当地では「収入のある人々」の中に入る。この島の長老アンロー・ジャケオ(七二)の家のすぐ横に小さな新しい墓があった。昨年末、首を吊って自殺した長男の墓だった。

マジロでのビキニの人々の暮らしはすっかり貨幣経済にとりこまれ、父親の金を時々せびっていた長男は、最後に借りた百ドル(二万一千円余)が返せなく、思い余って死んでしまった。

エジットにいる四〇人余りの成人男子のうち定職のあるのは二人の大人など四人しかいない。あとはその日、その日をぶらぶらと暮らしている。ヘナナとは、マーシャル語で「良くない、悪い」という意味。